

アカシア夜話 アカシアンナイト
第14話 (41回生の原爆の記憶)



広島で昭和20年8月6日に起きたことを語るとき、市内の建物疎開の動員中に中学校や女学校の1、2年生が甚大な被害を受けたことを避けるわけにはいきません。

しかし、附属中の1、2年生だけは例外で、原爆による死亡は残留組の1年生10名、2年生1名と非常に少ないのです。そこには、先生方の冷静な判断がありました。原爆投下の2週間前、農村動員の名の下に1年生は賀茂郡原村(現 東広島市八本松町原)に、2年生は豊田郡戸野村(現 東広島市河内町戸野)に疎開していたのです。

そして、8月6日朝、懐かしい広島の家族に会うために、広島に向かってる附中1年生がいました。その特別な体験、そしてやっと会うことのできたお母さま、お兄さまを、1ヶ月後、目に見えない放射線の影響で亡くされたこと、70年経ってなお慕ふ思いを、高田勇さん(41回)に伺いました。

昭和20年4月

甲斐：高田さんは、昭和20年(1945年)の入学ですね。**高田**：そう、明治39年(1906年)にできた校舎をギリギリ知るとるんですよ。かなり古かった。門を入るとコの字型の校舎で北側に北組と東組、南側に南組、雨天体操場や図書室もありました。2階建ての木造校舎で、敷地内に小・中・高師・文理大があって「四つの学び舎」という歌がありました。**甲**：狭いですよね。合同の運動会っていうのは、どこでやっていたのですか。**高**：(昭和初期の地図を見ながら)ここに(現在の中区平野町辺り)大学グラウンドってあるでしょう。ここです。うちの兄貴は附中31回じゃけ、親父と何回か見に行っただ。兄達が三八式歩兵銃で空砲の斉射のパンパンという大きな音が怖かったのをよく覚えてます。

農村動員挺身隊

岡田：でも、入学後まもなく疎開されたのですよね。**高**：疎開じゃないんよ。農村動員挺身隊。僕らは、出征などで働き手のなくなった農家の手伝いをするのだと、意気揚々と原村に向かいました。広島から逃げるなんて気はさらさらなかったし、まさか原爆が落ちるなんて思わなかったからね。**甲**：でも先生方は逃がす方便を考えたということなのでしょう。**高**：そう、私が言いたいのは先生が賢明だったということよ。それは今の時代でも同じじゃけどね。時流に流されず、冷静に判断された。よそは皆亡くなってるでしょう。**甲**：建物疎開に行った方は、ほぼそのクラスが全滅していますよね。

高：我々のところは不運な1年生が10人、2年生は1人、授業中の科学学級4年生が2人。**甲**：県下の中学に建物疎開の話が出たとき、附属の先生を皮切りに、危ないといふん言ったけれど、結局逆らえなかったとか。**高**：そう、でも国立だから、県の言うことを聞かなくてもよかつたし、とにかく動員という名目で。このことは84年に出した「昭和20年の記録」にも書いてある。**甲**：しかし、原村へ行かれたのは、後から見れば、ぎりぎりのタイミングでしたね。**高**：科学学級の優秀な生徒を死なせてはいけないということで、まず、科学学級の1～3年生の疎開が比婆郡東城(現 庄原市東城町)に決まり、次に2年生が父兄の協力で戸野村へ行くことが決まりました。しかし、1年生の受け入れ先がなかった。食糧事情の悪い時に、食べ盛りの子供たちを引き受けてくれるはずがない。農業科の宮岡力先生がほとんど困っておられるのを、ご実家のお父さまが見かねて、近所の農家を説き伏せ、原村で受け入れようと言ってくださったそうです。これも大正3年(1914年)から農業科(園芸)を附属に導入してくれていて、宮岡先生が附属におられたからこそできたことです。**甲**：農業(園芸)という科目があるとは知りませんでした。**高**：だから附属には千田町に農園があったでしょう。同級の及川(洋一)君や田村(慈朗)君は、当日この農園へ行く途中に生き埋めになって亡くなったのですよ。(他にも十数人の大火傷者がいた。)

8月6日

甲：ところで、なぜ、8月6日当日、高田さんたちは広島に向かっておられたのですか。選ばれて、報告書のようなものを届ける使命があったと伺ったのですが。**高**：新井君がなにか報告書を預かっていた。後から聞いたら、大したことは書いてなかったらしいけど。逆に言うところ、そういう名目がないと汽車の切符が買えなかった。わたしが選ばれたのも、農家の手伝いにたくさん回数行ったというだけです。新井(俊一郎)君、笠間(弘丈)君、西川(亮)君、西川(廉行)君、私、そしてたまたま面会に来られていた永谷(義和)君のお母さまと偶然会って、6人で広島に向かいました。前の晩はしゃぎすぎて、始発に乗り損ねました。もし始発に乗っていたら、早よう広島について、わたしらは死んどる。7時半ころ原村教順寺(八本松駅まで4.5km)を出て、七つ池の辺りで早弁をしました。その時、ブーンと音がして、B29が広島の方へ飛んでいくのが見えました。気象を確かめる観



P r o f i l e

高田 勇氏(41回)略歴

特記すべき事 下記の如し
1945年 栄えある附中入学4ヶ月後アメリカ空軍B29による原爆攻撃により両親、長兄他、幼、小、中、女学校の友達、知己、親類等50人以上を一度に失う。痛恨極まりなし。1994年 新さくら丸で、西廻りにて世界一周。2012年 広島県歯科医師会より8020ベスト10受賞。2009年 喜寿の歳“地獄の1丁目”迄行くも“まだ現世での修業が足らぬ”と追いつきられ現在に至る。

測機だったのでしょう。

八本松駅(広島から20km)で汽車を待っているとき、ピカッと光が来た。これが8時15分。あら、なんかの思うて。その後、どどどと振動と轟音、おかしいと思ったら今度は衝撃波が来て、耳がツーンとした。窓から見ると落下傘が2つか3つ見えた。そして、山と山の間から、キノコ雲がもくもくと湧き上がってきました。「何かな何かな？」と言いながら、8時半ころ汽車に乗りましたが、瀬野(広島から10.6km)まで行ってそこからは動かなくなった。ガスタンクの爆発だという話だった。迷ったけれども、もう原村には帰りたくない、広島に向かって西国道を歩き始めました。

中野の砂走(現 安芸区中野1丁目)の辺りで逃げてくる人と出会うようになりました。皆、顔が真っ黒で、皮膚が垂れ下がった腕を前に突き出して歩いていた。空から石油を撒いて火をつけたと言っていた。**岡**：誰も何が起こったかわからないのですね。**高**：何がなんだかわからなかったね。私らも広島へ向かうのに必死で。8月の暑い時によく脱水にならんかったと思うね。負傷者を乗せたトラックもやってきた。遠くに比治山が見えて、鳥居が見えるのに、そのそばの御便殿(日清戦争時、帝国議会が広島に仮設置された事に伴って、天皇陛下の休息所が設置された。日清戦争後これを比治山に移設し御便殿と呼んだ。)が見えない。何があったんだろうと思いました。海田市付近では屋根瓦が捲れたり、窓が

ラスが割れていて、不思議な感じでした。
東大橋では憲兵隊がおって、市内に入っちゃあいけないと言うのですが、新井が例の書類を見せるとすんなりOKになりました。**甲**：やっぱり国立の強さですかねえ。**高**：そう。皆と別れて、段原の実家に行きましたが誰もおらんので、みんな死んだかと思うた。大正橋、広島駅、東練兵場、大内越峠(おちごだお)を抜けて、もしもの時は逃げるようになっていた中山村へ向かいました。**岡**：爆心地の方へは行かれなかったのですね。**高**：燃えてないから大丈夫のような気がして。今思えば、もう燃え尽きとったんじゃないね。中山村に入ると夏蛭が光っていたのを感じとる。そして、とうとう踏切のところで、母と兄に出会うことができました。私は現在83才になるけど、あれほど大声で泣いたのはこの時だけです。**甲**：ほっとされたのですね。ご家族はどちらで被爆されたのですか。**高**：原爆投下時、家族は鉄砲町の社宅の茶の間にいたそうです。母と長兄は爆風で吹き飛ばされ、隣室に掘った防空壕に転がり落ちた。父は落ちてきた天井の下になり、即死だったと思われる。すぐ隣で呼んでも返事がなかったようだ。母と兄もそのままでは蒸し焼きになったかもしれませんが、隣の方が助け出してくれた。一緒に上流川通り、泉邸(現 縮景園)へと裸足で逃げ、鯉で川を渡り、饒津神社で同級生の久保田訓章君(現 広島東照宮宮司)のお母様から下駄を貰って、中山村へと逃げたそうです。でも、その時はほとんど無傷だったのですよ。翌日、兄と二人で京橋通りを通って、鉄砲町の社宅に行きました。通りは両側から焼けた家が倒れて道路がふさがっていて、真ん中がわずかにへこんどる。そこを歩いて行った。家は全焼していてまだ熱くて、中に入れなくて、諦めて福屋の横を通って、学校に向かいました。報告しようと思って、馬鹿正直に。平田屋川言うて、今は埋め立てて並木通りになっているけど、そこを通って行った。で、ここら雑魚場町(現 中区国泰寺町1~2丁目及び小町)で、一中はここでたくさん亡くなった。**甲**：建物疎開の作業中ですね。女高師附属女学校、女学院、第二県女の約1800人が亡くなった



次兄の入営に際して昭和20年4月撮影：
後列左より、本人 勇、長兄 正弘、次兄 弘夫、前列左より、母 嘉子、祖母 リノ、弟 資生、父 肇

のもここですね。**高**：そう、県師附小(現 広大附属東雲小)の友達も亡くなったのですよ。ここが爆心から800m。母校も焼滅してはいたけど、文理大には桂(喜一)先生や満窪(鉄夫)先生がおられました。さらに翌日、鉄砲町で父の遺骨を拾うことができました。高温で焼かれて、真っ白な遺骨でした。

お母さま、お兄さまの死

高：兄はかすり傷程度で、軽傷者として町内の手伝いをしたりしていました。私は7日8日と市内を歩き、9日は休養、10日に母と二人で三原市郊外の母の実家で3泊、13日に八本松で途中下車し原村に帰って、15日に終戦、18日に広島へ帰りました。帰ってみると兄はひどく衰弱した状態で、寝たり起きたりになっていました。25日ころには高熱が出て、体中に赤い斑点(内出血)が出て、口腔内にも出血し、9月2日遂に息を引き取りました。22歳でした。そして、5日には母も同じようにして亡くなりました。比治山山麓に穴を掘って、雨の中軽油をかけて、弟と二人で火葬しました。

鉄砲町の社宅があったのが、爆心から1km弱。この1kmの距離が生死を分ける。1km以内で被爆した人は、屋内外を問わずほとんど亡くなると。近所の方もその時は逃げとるけど放射線です。母や兄が亡くなっていくのをそばで見ている、その時はわけがわからなかった。一昨年のNHKの特集「終わりなき被爆との戦い」でやっていたけれど、放射線によって染色体が分断されて、修復できずに細胞死(アポトーシス)するのだね。そのようにして、たくさんの細胞が死んでしまうから、臓器がやられるし、出血する。免疫系もだめになって、感染症を起こす。母や兄はこの亜急性の放射線障害で亡くなったのだろうね。**岡**：目に見えないから怖いですね。**高**：今、福島のことがあるけど、目に見えんから、ピンと来てない人も多いだろうね。兄高田正弘は附中の31回生だから、慰霊碑に名前があります。これは兄の広島高校の卒業アルバム。ほら、検閲をくぐって、こんな写真を貼っている。(アメリカの女優さんとの合成写真)実際には知恵者が居て、検閲の後貼ったらしいけど。私はこの兄の影響をものすごく受けていたのですよ。顔も似とるし…。

終戦後

高：原村の南部兵舎で、泊まり込みで学校が再開されました。寒くてねえ。2月に広島から通って良くなった時はうれしかった。毎日、復員兵でいっぱい汽車に乗って通いました。2年生になった時に西条町吉土実(現 東広島市土与丸)の吉土実国民学校へ移ることができた。そ



生徒手帳の誓詞と生徒訓條

の頃には旧校舎で被爆死された科学学級4年の加藤恭三さん(38回)のお父さまが、材木を提供してくださり、新校舎の建設が始まっていました。

そして、昭和22年(1947年)1月より千田町の新校舎で3学期、4月には学制が変わり、男女共学となって女子(43回)も入学してきた。もう、これは大事件。クラスもAからEの5クラスになりました。先生方は大変だったでしょうね。

これは1年生の時にもらった生徒手帳、「我らは天皇陛下の学徒なり…」って誓詞があるでしょう。戦時中これを読まされよったけど、戦後、小谷(等)先生が作った創造、貴節、責任、信愛の言葉に書き換えたんですよ。自由の世界になったからね。映画館や喫茶店に入ったらいかんっていう規則も、勝手に[可]に書き換えた。**甲**：高田さんが可にいただいたお陰で、後の僕らがその恩恵を受けたんですね…。**高**：まあ、原爆地獄と食糧飢餓時代を経験した者には最早怖いものはないよ。

編集を終えて

今回のインタビューでは、様々な資料を見せていただきました。当時の高田先輩の日記は、13歳の少年が書いたとはとても思えない大人びた字で、日本のために戦いたいという思いであふれていました。

また、最後の家族写真や、お兄さまの卒業アルバムなどを拝見しました。その中には広島高校講堂(現附属高校講堂)前での笑顔の 写真もありました。

これらを拝見して、70年前、家族の平和や少年の青春が、たった1発の原子爆弾によって壊されたことが、改めて現実として迫ってまいりました。そして、高田さんが何度も繰り返しておっしゃっておられた放射線障害の怖さも。

母校には先輩方の作られた、謝恩碑(昭和56年建立 附中1年生の命を救った母校の決断に対する謝恩の碑)や原爆死没者・戦没者慰霊碑があります。是非、碑の前で足を止め、今一度母校の歴史を振り返ってみてください。

編集：岡田 美香(76回)

編集：宮井 ふみ子(76回)

文責：甲斐 稔 (63回)